

「剛柔の息吹」石郷岡師範と山口剛玄先生との出会い

昭和49年教育学部卒伊藤隆司 記

昭和45年私は大学一年生で、石郷岡勇治師範(39歳頃)の剛柔の息吹、形サンチン(三戦)、テンシヨウ(転掌)を初めて見た時の迫力には驚いた! 師範はどこから声を出しているのだろうか?と…。先輩一人ひとりの息吹とは、またひと味違っていた。そして、約束組手の時の転身の何と速いことか? 師範の動きは目を見張るものがあった。

同じ昭和45年時、山口剛玄先生は秋田へお越しになる機会があった! 修武館でサンチン、テンシヨウの息吹を見た。もの凄い迫力だった。とうに60歳は越えていた剛玄先生、身体の柔らかさが半端ない。坐禅で足を組んで、膝でボンボン跳ねていた。

昭和49年、大学を卒業して、OB会発足の為にならぶ都内を奔走していた。石郷岡師範の紹介で、当時の剛柔流理事長だった世田谷区在住の香川浩義先生の自宅を訪ねた。この時に香川先生のお腹を触らせてもらった。剛柔の息吹をしているとこんな腹になるんだと柔らかい腹が締まっていくのがわかった。そして、坊秀男元大蔵大臣のSPボディガード兼秘書の方を紹介され、都内のホテルで会った。やはりボディガードをやっている人達は空手家で、体を張ってやっているんだなと思った。

西荻窪にあった山口剛玄先生の道場にも行った。ひととおりの基本、移動が終わると組手に入った。師範代らしき人が組手の相手をしてくれた。猫足で構えて、突いてこいというので連続突きでいったところ、掌底で払われ、顔面に掌底を当てられた。その瞬間鼻から血がドバーッと出てきた。道場の床に血がしたたり落ちた。直ちにティッシュペーパーで鼻詰めをした。「ハハ、当てるんだな」と思っ、またかかっていこうとしたら、周りから止められた。鼻が面疔のように腫れたのである。その後、ある会派の会合で、剛玄先生と会うことができた。先生に、石郷岡師範の弟子だと伝えると懐かしそうにお話をされ、「頑張りたまえ!」と励まされたのを覚えている。

この度、53年ぶりに「剛柔の息吹」(日貿出版2200円+税 山口剛史著)の改訂版が出版された。山口剛玄先生は、明治42年鹿児島生まれ、平成元年永眠享年81歳。昭和45年「空手道教範」出版。昭和46年日本空手道専門学校設立。「剛柔の息吹」は、剛玄先生の壮絶なる人生本である。学生時代、満蒙時代、終戦、捕虜生活、戦後、剛柔流空手道再建の道へと続くのである。

剛玄先生の組手は、相手を威圧したり、当てたりする粗暴な立ち居振る舞い

を禁じた穏やかな指導であった。組手の姿勢は、「猫足」の構えで、上の手が高く、閑手の縦構えで自分から仕掛けることなく相手の出鼻を捉えるタイミングで反撃していた。技は、低い蹴りと裏打ちや閑手による掌底が多かった。「攻撃を仕掛けようとする」と膝や肘を押しえられて技にならず、スーッと懐に入り込まれて、既に目の前に先生の手が来ている感じだった。」

「動きは、猫足による斜め移動と円を描く様に回り込む」というものだった！剛柔流独特の基本形、三戦、転掌の使い方も解説されている。「三戦」は剛柔流のすべての基本！三戦は、呼吸法の会得である。どんな状況にあっても絶対に乱れない呼吸である。人間の生命の根源は、呼吸を鍛錬することが、すべての源となる。この呼吸を「息吹」と名付けた。三戦は、陽の息吹で最も力強く大きな息吹で“剛”の呼吸といえる。剛玄先生は「私の空手の原点」は、自己の錬磨である。どんな攻撃でも防御できる体づくりである。そのためには、自分の気力、精力まで充実させることを説いている。

この剛柔の息吹には、秋田の人々の縁も深く、東北地区本部長 石郷岡勇浩師範の名前も載っている。佐川充雄先輩、八尋静男先輩（福岡県支部長）等秋田大学空手道人の先輩達の名前も掲載されている。

石郷岡勇浩先生を偲ぶ「空手還郷（くうしゅげんきょう）」の本より

P11 （昭和 30 年代）剛柔会副理事長 道友田崎修司先生と旧剛柔会本部道場で石郷岡大兄と 5～6 時間休みなく極限の稽古をした。剛柔流空手道の技術面での議論を红灯の地浅草、上野で酒を酌み交わしながら口泡をとばし夜の耽るのを忘れた。石郷岡大兄の不変の言は、「頭で覚えるより、体で覚えることが空手道にとっては、大事なこと。普段の生活の中でも、鍛錬はいくらでもできる。」とのこと。

石郷岡先生は、剛玄先生の本部道場を度々訪れ、どん欲に壮絶なる稽古を続け、剛柔流の極意を会得していった。私は、石郷岡師範にお願いして、形サンセールとシソーチンの特別個人稽古をしてもらった。それが、今日にも活きている。この剛柔の息吹、形シソーチンを演武して日米大会で優勝することができた。石郷岡先生は、剛玄先生との出会いによって、本物の空手道に出会い、飽くなき空手道を追求し、己を磨いていったのだと思う！

石郷岡師範（中央四股立ち）の手組指導



山口剛玄先生の喜寿祝賀会にて



昭和47年秋田市内での山口剛玄先生（前列中央）の歓迎会



（「空手還郷」の136と137ページに掲載されている写真を引用しました。）

「レッコ、ナシテ」を読んで

昭和49年電気工学科卒腹子諭 記

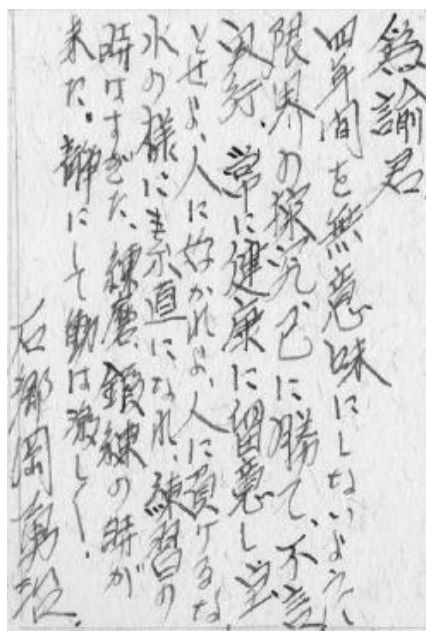
「レッコ、ナシテ」は実話をもとにご家族の姿が描かれている本で、2020年5月11日株式会社幻冬舎から第1刷が発売されています。著者は故石郷岡師範のご子息である石郷岡亮氏です。

この本の中に師範、奥様とご家族そして秋田大学空手道部の学生達が登場してきます。特に、師範宅での空手道談義、川反界限でのパトロール、旭川での寒稽古、寒風山走行、血判式等が、当時中学生であった著者の視点で執筆されています。今から50年以上も前の出来事でかなり記憶が薄れてしまいましたが、懐かしさのあまり空手道部員の時の写真や資料を取り出して、当時の四年間を思い出してみました。

以下の寄せ書きは大学卒業に際して、師範から頂戴した直筆です。

「己に勝て」、「不言実行」、「健康に留意」、「人に好かれよ」、「人に負けるな」等は、いずれも社会人として必要不可欠な文言を書いて戴きました。

大学四年生になった頃には稽古が終わると、主将以下四名で空きっ腹に高清水か大平山の一升瓶を抱えて、ご迷惑も顧みず何度か師範宅に押しかけたことがありました。その節は奥様の手料理を腹一杯ご馳走になりましたし、目を輝かせて熱い口調で剛柔流空手道について語っておられた師範のお姿が忘れられません。日本酒のせいだけではありませんが、熱が入ると十手、型、組手、空手道歌など深夜そして近所迷惑等も顧みずに行動するのが常でした。





(パトロール出発前)

秋田市内の盛り場であった川反界隈をパトロールした時に旧空手道場の入口前で撮影した1枚です。

空手道着、袴そして足袋に鉄下駄のいでたちでした。

先輩からはかつての腕試しや武勇伝の話を何度か聞かされていましたが、しかし当時そのようなことはなく、度胸試しのために市内をパトロールの名目で歩き回っていました。

この時市内の歩道には雪が残っていました。パトロール開始時には問題なく歩いていたものの、次第に鉄下駄の重さに負けて、スキーの様に引きずっていました。Kデパートでエスカレーターに乗ろうとして、鉄下駄を脱ぐように注意されたことを思い出しました。

以下写真左側は秋田駅前から男鹿半島寒風山までの40kmを裸足で走破した後、頂上の回転展望台手前の芝生で柔軟体操をしているときに撮影した1枚です。走路途中の男鹿線の出戸浜駅入口付近で休憩した時に、おにぎりとブッカキ氷を空き一腹に流し込んでいたように思います。この時の大量のおにぎりは、早朝から師範の奥様と親戚の方が握ったもので、師範がダイハツの名車でブッカキ氷と共に運搬して戴いたことをこの著書で改めて思い出しました。裏方としてサポートして戴いたお陰で、当時全員完走できました。記憶に残っているのは完走できたということだけで、残念なことに今となっては、鳥海山、土崎港、八郎潟や八竜橋などの明媚な風景を思い出すことができません。



(走行後寒風山にて)



(旭川での寒稽古)

「冷水にザブン 空手のけいこ」は、当時の秋田魁新報に写真と共に掲載された記事です。「エイッ、トオーツ」と掛け声も勇ましく猛稽古。この日は時折小雪が降り、最高気温2.9度の中での猛稽古で、秋大空手道部の23人が、12月16日、師走の冷たい風が吹き抜ける旭川に稽古着一つで飛び込み、気合のこもった型を披露した。と記述されていました。

川の中では足のケガを防ぐために草鞋を履いていたが、「川のクリーンアップの成果が上がったのか、今は綺麗になりました。」と一段と清々しそう。と環境問題に触れた記事になっていました。川から上がったら草鞋を脱いで、隊列を組み裸足で雪道を走って、大学構内の道場まで戻ったが、あまりの寒さに感覚が麻痺していて痛さも判らない状態でした。全員で体を温めた後は、合宿所で奴隸、平民、天皇、神様と言われた学年を超えた無礼講で、賑やかに大宴会を催すのが恒例で大いに盛り上がりました。

秋田大学時代、特に剛柔流空手道の稽古は厳しく、いつも途中で辞めたいと思うもう一人の自分と格闘していました。しかしもう一人の自分に負けなかったことで、妙に自分に自信が持てるようになりました。

これからは、師範の直筆に書いてある通り健康に留意して、人に好かれるように努めていこうと思います。

「あの頃」を思って

昭和53年地質学科卒 三田 勲

今回、伊藤隆先輩や腹子先輩のご要請で、この様な拙文を書くことになり、少し戸惑っております。大学卒業以来、空手には縁が遠く、昨年の10月に突然、伊藤隆先輩から電話があり驚いた次第です。その中で、11月にOB会があるとのことでした。また、1年先輩の西本さんから御連絡頂き、OB会に行くつもりとのことでした。私も何とか都合をつけて出席させて頂きました。私が一番若手でありましたが、諸先輩の元気を姿を拝見でき懐かしい思いが湧いてきて、この様な拙文を書く事になりました。

私が大学1年生の時には、4年生が伊藤憲主将を筆頭に佐藤さん、柴田さん滝内さんなど数人の方がいらっしゃり、3年生が栗原さん、石動さん、熊谷さんの3人、2年生が西本さん、内野さんなど3人だったと思います。どう言う訳か解りませんが、先輩の2、3年生の部員が少ない状況でした。私が入学した頃はブルース・リーの映画が流行っていた事もあり、最初に10人以上入部し、最後は8名となり、その中には教育学部よりマネージャーとして鳥羽さんもおりました。

大学入学当時は何も考えておらず、毎日なんとなく時間をつぶすより、高校と同じようにサッカーあるいはラグビーでもやるかな、とおもむろに考えていました。あるとき寮の同室の4年生から、「空手部は強く、東日本大会で3位に入り、世界選手権に出た方が指導しているらしい」と話してくれたのが耳に残っていました。高校ではサッカー部でしたが、指導者が不在でしたので、自分たちのお粗末な考えで、一貫性の無いサッカーをしておりました。「サッカー部でボールが蹴れると思うな！」などと言う先輩もいたぐらい、ボールテクニックはともかく、毎日が基礎体力作り、何かというと走る・・と言うより「走らせる」。そんな具合でしたから、あまり進歩しなかった様に思います。他校の指導者が選手にアドバイスしている姿を見ると羨ましく思っていたのでした。

そんな経緯もあり、ちゃんとした指導者のいるところで「個人競技をやってみようか」「最後まで勝つ思いができるかもしれない」などと、勝手に思いこみ入部した次第です。入部してみると、中学、高校と運動クラブに入っていた経験もあったので、空手部の練習や慣習にそれほど躊躇することはありませんでした。むしろ皆さん親切丁寧に指導して下さいという感じで、石郷岡師範も頻りに指導に来られ、温和で丁寧な方という印象でした。また、クラブ活動は高校時代と違って、夏休み、冬休み、春休みには帰省して一息つけるので、メ

リハリが効いていて、意外と居心地が良かったような気がします。

しかし、一年生の時にはあまり感じなかったですが、試合前に成ると藤原監督が見えられ、4年生も緊張した様子がなんとなく雰囲気として伝わってくるのを感じていました。2年、3年と年月が過ぎると、「勝負への執念」を藤原監督が語られるのを聞き、伝統の空手部を保つという事が、けっこう身に染みて重く感じて参りました。

藤原監督には練習で組手の稽古をつけて頂きましたが、はじめのうちは、とても太刀打ちできる状態ではなく、満身創痍でした。いつしかこの人に勝てるようになるれば・・・と言う思いが湧いてきたように思います。その様な事もあって、私の記憶では2年、3年時の東北大会の団体戦ではそれなりの成績だったよう思います。私の同期生達もかなりの実力者が揃っており、藤原監督がいつも言われていた、「東北は僅か6県だけ、全国区で勝負しろ」でしたので、全国区で勝負したいという思いが、皆に湧いていたと思います。

4年生に成った春、東日本大会が札幌で行われ、此処でこれまでの以上の結果を残したい、と思って臨みましたが、残念ながら2回戦でこの大会2位か3位に成った大正大学と当たり、敢なく敗退し、夢想到終わったという結果でした。

その後、夏には東北総体がありました。なんとなく盛り上がらない雰囲気、なんとかしなくてはと思いをながら臨んだ大会でした。そのせいか団体戦はまさかの1回戦で敗退、主将として情けない思いでした。あとは個人戦のみでしたが、すこし投げやりに成った気分だった様に思います。

その様な状態でしたが、何回か勝ち進み、準決勝の相手も、前の試合を見た限り、負ける相手では無いと思っておりました。試合が始まると、相手と小競り合いから組合うことが何度かあり、顔に当てられ、私も興奮してしまい、審判にやめられました。相手には嚴重な注意を与えておりました。その後、私が上段突きで1本先取し、試合を決めて仕舞いたかったので間合いを詰めて行くと、再度小競り合いから組合になり、この時に私の顔面に正拳がもろに入り、前歯が2本折れ、腰から床に落ちてしまいました。このとき、審判も見かねて、私に反則勝ちという判定を下しました。自分自身この程度の相手に、情けない勝ち方をしたと感じていました。

そして決勝戦でしたが、準決勝でもらった正拳のダメージが意外と堪えていて、鼻から前歯付近が腫れ、痛みがかなり走り、アイシングしながら横になって堪えておりました。そこに、応援に駆けつけて頂いたOBの佐藤先輩から、「大丈夫だ、勝てるぞ!」と言われた事を、なんとなく覚えております。私も決勝相手の試合を見ており、動き回って、虚を突いて、走り込む様に蹴りや突きで攻めるタイプでした。自分の間合い近くまで詰めて行けば、多少遅れても、動いた瞬間に上段突きの「後の先」でも行けると感じていました。幸い藤原監督

も、場外から「間合いをもっと詰めろ、下がるな！」とか言ってくれていたと思います。そんな作戦が功を奏し、2本とも上段の待ち突きで決めることが出来、勝利する事ができました。「全国区での勝負」は叶いませんでしたが、何とかこれで、藤原監督のご恩に多少報いる事が出来たのかもしれない。

東北大会が終わると、私は地質学科に在籍していましたので、卒論のため7月から11月の雪が降るまで、県南の山形県境周辺の山を中心に地質調査する事になっていました。その関係で7月以降はほとんどクラブ活動には出られず、この間、私に変わって部を指揮してくれた同期の薄田君や渡辺君には感謝する次第です。特に薄田君は、後に後輩の指導のため監督を引き受けてくれています。また、12月令宿の旭川での稽古も、卒論の纏めで、連日徹夜が続いており、かなり「ボーッ」とした状態でした。川反の旭川から帰って宿舎に入ると、折からの寒波の影響もありストーブの前で震えが止まらず、気がつくど、藤原監督、後輩の田中くんや空手部の皆に体中を摩ってもらっていました。なんとか体温が回復して、正気に戻った次第です。4年生で望んだ冬令宿での失態、皆さんにご心配かけ、なんとも情けない最後になって仕舞いました。

卒業後、私は石油鉦床講座に属していましたので、石油関係の探鉦の仕事を希望していました。生憎、就職難の時期でもあり、学校に求人があったのは1社のみでした。同期に希望する人間がもう一人いた都合で、二人でくじ引きをして決める事になりました。藤原監督には「勝負への執念」のご指導を受けながら、結果、見事あっけなく敗退。仕方なく、東京の地質コンサルタントの会社に入りました。しかし、2-3ヶ月もいると、ここではどう考えても自分の実力が着くとは考えられず、11月には退職しました。

そして、伝手があって名古屋で秋田大学の先輩が個人で営むコンサルタント会社に入りました。しかし、この先輩、2年後に「キャバレーの女性と失踪」という波乱を起こしてくれます。他人の話で聞くには面白いかも知れませんが、いざ自分の身近な人がこういう行動をすると、けっこう切実です。とにかく、失踪した先輩が戻るまで、なんとか維持して、その後は名古屋を去ることにしました。そして、一昨年まで務めていた天然ガスとヨウ素を生産する会社にお世話になります。小さな会社ですが、ここでは理解ある上司もいたことで、色々な経験をさせて頂きました。アメリカでの探鉦開発、国際海洋掘削計画(Ocean Drilling Project)への参加、学位の取得、学会での論文賞の受賞、経営への参画など・・・。

思えば、先の見通せない私でも、周囲の人達に恵まれ、空手や仕事をなんと

か熟して来たことを、懐かしく感じるができます。デンマークの小説には「ラクダは砂漠に住めて、キリンに住めないのは何故」と言う一説があるそうです。「キリンはあまりにも遠くまで見通せるため、そこにオアシスが無いことを察知して絶望してしまう。ラクダはわずかしか見通せないので、オアシスを信じて、無心で歩を進めることが出来る・・・」。

たぶん空手部の経験は石郷岡師範、藤原監督の指導下、この時期に一緒だった諸先輩、同期生、後輩の皆さんと、

オアシスを信じて、夢中で歩を進めた。

そんな「あの頃」だった・・ように・・・。

以上



筆者（マッターホルン麓にて）

空手道との出会い、人との出会い

昭和54年教育学部卒田中明 記

中学生のとき膝を故障し、好きだったバスケットボールが続けられなくなった。高校時代は放送部に入り、運動とは無縁の生活をしてきた。それがどうして空手道部に入部したのだろう。それまでの自分を変えたい、もっと強い人間になりたいという、青春時代独特の思いの所為だろうか。大山倍達やブルース・リーが大人気の時代でもあった。

運動をしてこなかった身には、空手道部の練習はとても辛かった。身体中の筋肉が悲鳴を上げた。これはとても続けられそうにないと思っていたら、石動先輩が、筋肉痛は一週間我慢すれば消えるからと励ましてくれた。本当に一週間で痛みが消えた。天徳寺や手形山へのランニング、鉾山博物館での坂道ダッシュやアヒル歩きも辛かったが、四股立ちの移動がひととき大変だった。夏には再び膝を痛めて手術をした。それでも空手道部は続けたかった。

初めての寒風山ランニングでは、部旗を預かっているにもかかわらず、すっかり寝坊してしまった。電話で起こされ、大慌てで啓明寮を飛び出した。それでも、先輩たちは文句ひとつ言わずに秋田駅前まで迎えてくれた。八郎潟の辺りにさしかかったころ夜が明けてきて、その光りの中にマツヨイグサの群生が黄色く輝いていたのをよく覚えている。寒風山山頂での型演武は気持ちよかった。

空手道部の先輩たちは練習には厳しかったが、普段は優しくかった。特に一年上の三田先輩にはとても可愛がってもらった。三田先輩は、西本先輩に続いて東北チャンピオンに輝いた強者である。絶対に後ろに下がらない上段カウンターの名手だ。

バイクに二人乗りをしてタラの芽採りに行ったのがよい思い出だ。途中でバイクが動かなくなって、二人で押して帰って来た。鉾山学部の地質科の研究室で天ぷらにして食べたタラの芽の味は格別だった。卒業後、景山にお住まいの先輩を三田先輩と一緒に訪ね、海に潜ってサザエを採ったのも懐かしい。今では年賀状のやりとりをするだけになってしまったが、また機会を見つけてお会いしたいものである。

卒業するとき石郷岡師範に挨拶に行った。川崎で教員になると言うと、川崎には伊藤隆司という先輩がいるから訪ねるといいと教えてくださった。縁と

いうのは不思議なもので、初任者として同時に赴任した友人が、伊藤先輩の勤務する学校で教育実習をしていたのである。

伊藤先輩との付き合いは「おい、田中、アメリカへ行くぞ。」の一言から始まったような気がする。ロスアンゼルス・ラスベガスの旅は珍道中だった。「稽古着を持って来いよ。」と言われ、ロスの街を稽古着でランニングし、公園でトレーニングや演武をした。香港・マカオ・中国（広州）にも一緒に旅した。

津田山にあった養秀会の道場にも呼んでいただいた。大和市で行われた空手道大会にも出させていただいた。日産・追浜の工藤先輩の空手道部の練習にも参加させていただいた。

伊藤先輩が開かれた隆武館道場の練習、大会、昇級・昇段審査等にも関わらせていただいた。

また、ボウリングやゴルフにも誘っていただいた。特にゴルフはそのイロハから教えていただいた。「打ったら走れ。」が基本だった。ショートコースにも随分連れて行っていただいた。今ではゴルフが私の生涯スポーツになっている。

空手道を通して、身体を鍛え、克己の精神を身につけることが幾分はできたのではないかと思っている。それ以上に、様々な人との出会いにこそ感謝をしている。



「過去を振り返って」

昭和50年土木工学科卒伊藤憲二 記

私は昭和46年4月に秋田大学鉾山学部土木工学科に入学し、空手道部では4年次に主将を務めた。一年先輩の伊藤先輩、腹子先輩よりメールをいただき「秋田大学空手道人」のホームページに掲載する原稿を書くことになり、空手道部での思い出や、社会人になってからの生活、近況などを紹介したい。

(空手道部の思い出)

中学・高校と野球に熱中し、特に、秋田高校時代は硬式野球部で甲子園を目指し練習に励んだ。しかし、入部した24人の私の同期は一年の夏までに5人になり、結局3年間一度も甲子園の土を踏むことができなかった。空手を始めるきっかけとなったのが高校3年の夏の大会も終わり、受験勉強に本腰を入れ始めた頃の学校からの帰り道、秋田大学の空手道部の道場での練習風景が目に残った。その時の部員の気迫・迫力に感動し、是非、自分も「空手をやってみたい」と思うようになった。何度か見学するうちに、やるなら秋田大学の空手道部という気持ちに日に日に強くなり、入学後はすぐに空手道部の門をたたいた。道場の部室を訪問したとき、私の入部に対応したのが、当時の主将であった武井先輩であった。入部当初は体力に自信があると思っていたが、受験勉強中に体を動かさなかったせいもあり、腕立て伏せ・腹筋・背筋運動が数回しかできなかったこと練習を始めてから2週間程筋肉痛に悩まされたことが思い出される。私は、主将を務めたが、各大会では緒先輩や後輩のように、個人戦では華々しい戦績を収めることはできなかった。今、空手道部の時代を振り返ってみると

- ① 1年生で努力賞を頂いたのが個人としての唯一の賞である。学校の授業を終えるとすぐに道場に行った。道場の床を雑巾掛けし、何とも言えない緊張感に包まれて練習を待つ毎日であった。最初は、道場の隅で拳の握り方に始まり、立ち方、突き方などの指導を受けた。また、新入生の歓迎コンパではバケツを脇に置いてドンブリで酒を飲まされた。今では到底許されることではないが、私も酒に酔って自宅までタクシーで運ばれ、2~3日、二日酔いで寝込んだことが懐かしく思い出される。「酒は一生飲まないぞ」と誓ったが……。思い出と言えば、大会前の合宿も懐かしい。1年生は食事当番と朝「起床」の掛け声で全員を起こすことが主な担当であるが、団体生活を体験し、自宅生としては楽しい思い出の一つでもある。また、冬の合宿では、「市内パトロール」があった。羽織・袴姿で高下駄をはき、木内デパートの特にかわいい店員に「○○○の缶詰ありますか?」と言って缶詰を買ってく

るのが目的だ。「○○○の缶詰」はなかったが、これも修行の一つ、常に冷静で物に動じない強い心を養う行動と自分は信じている。

- ② 上級生になるに従って型も多く覚え、突きや蹴りのスピードが増してくると練習も楽しくなった。夏・冬休み期間は部活も休みであったが、毎日道場に出かけ型の練習やサンドバックを打ち込んだりした。特に力を入れたのが「巻き藁突き」だ。伊藤先輩の寄稿文にも「後輩伊藤憲二の拳だこは凄かった。」とあるが、毎日、巻き藁を突き肉が破れて血が出ても突いた。数日すると破れた箇所が瘡蓋になり、それでもまた巻き藁を突く。その結果、見事な拳だこができた。当時は自宅でも、暇があれば左手に持った極の棒で拳を叩き、拳だこを鍛えた。会社に入ってから同期や先輩に「その拳だこ凄い」と言われ何かと目をかけられた。そういう点でも空手をやって良かったと思っている。
- ③ 4年生での反省点だが、ある大会、たぶん剛柔流の秋田県大会だと思う。個人戦に私と同期の佐藤明夫君が出場した。抽選の結果、お互い両サイドに分かれて試合に臨むことになった。その組合せをみて、明夫君と「俺、お前の組合せの方がやり易い」。明夫君も、「逆の組合せ側がやり易い」と、かっぴんに組合せを変更して試合に臨んだ。結局、明夫君が優勝したが、後で、大会関係者が気付き、大会関係役員の須田前監督（当時の監督は藤原先輩）に、厳しく指導されたことが思い出される。石郷岡師範の執り成して結果は変わらなかったが、当時何でそんな非常識な判断と行動をしたのか恥ずかしい限りです。話しは変わるが、当時何度か藤原監督の自宅でかわいい奥様の手料理をご馳走になり大変お世話になった。
- ④ 4年間で空手道部も卒業。卒業の儀式「血判式」も懐かしく思い出される。1年生の時に4年生の儀式を見て、自分にもできるだろうかと思ったが、いざ血判式当日、「後輩に悪様な格好は見せられない」との思いで、立派に血判することができた。「武士が切腹に望む心境」とは、まさにこの気持ちではと想像している。ところで、あの血判状はどうなったのか？部室の火災で消失したとすれば、貴重な歴史ある品が悪くなったことになり残念だ。

(会社時代)

私は、昭和50年に日本鋼管（株）に入社した。当時、深く考えずに、給料が良いとの理由で会社を選んだが、入社後「金と命の交換（鋼管）会社」といわれていることを知った。会社時代の空手と係わりある出来事を紹介したい。

- ① 会社の入社試験は、面接と口頭試問のみであった。人事担当の役員や技術担当の部長など数人出席の中で面接を受けた。私は地方出身で、ほとんど東京に出たことがなかった。当時、就職解禁前の会社訪問は禁止という制度の始まりのような時期であったと思う。先生に「学生服での会社訪問はやめた方

が良い」と言われ、急遽、ジャケットとワンタッチ式のネクタイを購入して試験に臨んだ。たぶん、面接官も地方から出てきた「センスのない地方の学生」程度にしか見てなかったと思う。試験時、簡単な履歴書等は面接官の手元にあったと思うが、自分の「拳だこ」をみて、「すごい拳だこですね。どうやったらそういう拳だこができるのですか」と専ら空手談義に終始した。その席で五条訓を披露し、簡単な技術口頭試問で面接を終了した。入社後、会社の上司から技術口頭試問を担当した面接官が、東大出の当時の運輸省から来られた「鋼管杭基礎の日本の権威者」で、えらく私のことを気に入って入社を強く押してくれたことを聞かされた。これも、秋田大学空手道部のおかげと感謝している。

- ② 日本鋼管には、私の同期が200名近く入社した。旧帝大や早稲田・慶応など多くの学校から人が集まった。入社後の新人全体研修では、何故か早稲田と慶応の卒業生が多く、彼らは野球の早慶戦さながらに校歌を歌って張り合っていた。私はそういう光景を目にすると、「負けてたまるか、俺だって」という気持ちになり、空手道部時代に鍛えた根性で、恥も外聞もなく一人校歌を歌って対抗した。周りの新入社員が「あいつは誰だ、どこの大学だ!」と入社早々同期の中で一躍「時の人」になった。その後、研修会の飲み会や同期の集まりでは、度々空手の形を披露して喜ばれた。
- ③ 会社には、硬式野球部やバレー・バスケット部などプロになる選手やオリンピックに出る選手がいる部活はあったが、空手道部はなかった。そこで、独身寮の廊下や屋上で、腕立て・腹筋、形の稽古、近所をランニングするなど体を鍛えた。寮の近くに伊藤先輩のアパートがあり、ランニング中にお邪魔したことで、その後伊藤先輩が通われていた道場に誘われ、一緒に練習したことを覚えている。いつだったか、その道場の代表として大会に臨み、決勝まで進み外国人と対戦した記憶がある。尚、伊藤先輩には大変お世話になり、自分の結婚式で「空手の演武」を披露していただいた。ありがとうございます。

(近況)

大学を卒業して45年、会社を定年と成って7年が経った。現在は港湾環境エンジニアリング(株)という会社で、建築構造物に使用する鋼管杭の設計の仕事をしている。事務所が飯田橋にあり、毎日、天気良ければ上野から飯田橋まで歩いて出勤している。秋田には毎年両親のお墓参りに帰省している。時間があれば秋田大学を訪問し、小体育館を覗いては後輩が練習していないか付近を散策している。現在、学生時代に比べて体重が10kg以上増加し、定期健康診断では、毎回「メタボ」と診断されている。若い頃のように、体を鍛え強くなりたいという気持ちも傷いてこない。事務所の隣のビルに「極真会館の杉村道

場」があるが、道場を覗いて見ようという気持ちもおきない。昔自慢であった「拳だこ」もすっかり普通の拳になり、空手を修行したことを思い起こさせられるのが、たまに疼く手首の腱鞘炎と伸びきらない両肘だ。すっかり気持ちも体力も普通の人間になった。今は二人の息子（31歳と28歳）が早く結婚することを願っている。そんな現在の状況であるが、今回、原稿を書くことにより、改めて秋田大学の空手道部時代の学生生活や、新入社員時代の会社生活を振り返ることができ、失敗や反省点を思い起こす貴重な時間となった。緒先輩はじめ後輩の皆様方には、これからも、健康で楽しい人生であることを祈念し、私の寄稿文とします。

記念写真/前列が筆者（於秋田大小体育館付近）



記念写真/全日本大会会場前の筆者



記念写真/旭川で形演武の筆者



中学、高校、大学そして社会人として

昭和49年電気工学科卒腹子論 記

中学と高校の6年間バスケットボールで、地区大会や県大会に出場しましたが、残念ながら優勝に手が届くレベルではありませんでした。大学に入学したら団体競技ではなく、個人競技でどこまで出来るかを試してみたいと思う気持ちがありました。秋田大学入学後秋田高校近くで下宿生活を始めました。

そこには空手道部3年生の佐々木先輩、菊川先輩そして空手道部に入部したての佐藤先輩がおりました。当然の如く両先輩からは顔を合わせる度に強く入部を勧められました。しかし佐藤先輩の練習が厳しい余り、毎日葛藤している様子を見ていたので、なかなか入部する気持ちにはなれませんでした。大学1年生の夏休みに帰省した時には、空手道部に入って肉体と精神の両面を鍛えてみよう、次第に考えが変わっていききました。夏休みを終えて9月には思い切って入部しました。先ずは同期の1年生達に追いつくためには、どんなに稽古が辛くても一日も休まずに継続しよう、と決心して毎日努力しました。

3年生になった時に、当時の藤原監督に東北大会のメンバーに選んでいただき、個人戦に出場する機会を与えてもらいました。

1回戦の相手は奥州大学の選手でした。試合の内容をほとんど覚えていないが、左上段突きで技ありを取り、優勢勝ちであったと記憶しています。

2回戦の相手は東北大学の選手でした。右中段突きで技ありを取って優勢勝ちであったと記憶しています。

3回戦の相手は福島大学の選手でした。この試合で相手との間合いを詰めていた時に、相手が攻撃してくるのが判ったので後退しました。相手は右前足で私の左前足を払い、体勢が崩れたところを突こうとしていました。しかし空振りになり、逆に相手は体勢を崩しました。そこですかさず右手で相手の背中を突いて、見事に一本勝ちを収めることが出来ました。次はいよいよAブロックの4回戦(決勝戦)で、勝てばベスト4でした。この時の相手は東北学院大学の選手でした。試合終了後に聞かされた話ですが、相手は昨年の東北大会個人戦の優勝者という強豪でした。試合前に知っていたら、戦う前に勝てないのではと気持ちで負けていたと思われそうです。いまでも試合前に聞かされなくて良かったと思っています。(監督始め先輩方の配慮に感謝しています。)とにかくAブロックで優勝してベスト4に残りたいと思い試合に臨みました。相手が攻撃してくるタイミングで左上段突きを繰り出すべく、相手との間合いを詰めていききました。私が轉身しながら左上段突きを出したと同時に、相手は右上段突きを出してきました。この時副審が相手に旗を挙げて見えました。技あり

を取られてしまいました。試合の残り時間は多くなかったので、右前蹴りで挽回しようと考えて、相手との間合いを詰めて蹴りを出しました。しかし引きが甘く相手に足首を掴まれて、右中段突きを受けてしまいました。技あり合せて一本で敗けてしまいました。最終的にこの大会での秋田大学の個人戦の成績は、中野先輩が準優勝、佐藤先輩と私がベスト8どまりでした。

この年の秋には伊藤監督（藤原監督の代理）に全日本大会のメンバーに選んでいただき、団体戦の次鋒として出場させてもらいました。私は初戦、2回戦と2連敗した後、3回戦の中京大との試合を辛うじて引き分けました。結局私は団体戦では全然貢献できずに、秋田大学は3回戦で敗退という結果に終わってしまいました。（私を選んで下さった監督、応援して下さいましたOBの方達や先輩方には、今でも申し訳なかったという気持ちで一杯です。）

大学を卒業したあと建設会社に入社しました。

1985年ジャマイカにあるセメント工場の拡張工事のため、首都キングストンの現場事務所で働くメンバーに加えていただきました。海外赴任予定日はその年の10月17日でした。丁度その時期に妻は出産を予定していたので、妻は実家のある仙台で、私は会社の独身寮から赤坂事務所まで通勤する单身生活を始めることにしました。出国予定日の2日前に妻が入院したとの知らせを受けて仙台に向かいました。しかしご対面を期待して1泊までしましたが、待てど暮らせど出産の兆候がなかったので、諦めて翌日午後に赤坂事務所に戻りました。夕方事務所で先輩方から送別の会を開いてもらっていたら、長男誕生の電話が入り母子とも健康との連絡を受けました。その夜安心して独身寮に戻り、徹夜で海外赴任の準備と実家に預かってもらう荷物の配送準備を終えて、慌ただしく成田を飛び立って行きました。結局長男と対面できたのは翌年の6月1日で、8か月半後になりました。その後妻と1歳4か月になった長男とをキングストンに呼び寄せて一緒に生活を始めることが出来ました。この間現地での仕事は想像以上に厳しく大変なものでしたが、竣工後無事容先に引き渡し出来ました。1988年帰国する時にはロンドンとパリを経由して、家族3人で自由気ままに楽しい旅行をすることができました。この時に幼児であった息子が、今では30歳を超えて2人の娘の父親となりました。この娘たちと遊ぶのを楽しみにしている私は、今年古希の年齢になりました。

2017年10月に秋田大学空手道人という名称でホームページを開設して、毎月更新を重ねて参りました。（開設当初の名称は秋田大学空手道人会でした。）ホームページ開設の目的は以下のとおりです。

■ 秋田大学空手道部関連の活動記録を紹介したい。

■ 秋田大学空手道部OBと学生達との交流を深めたい。

ご意見やご希望がありましたらHPお問い合わせフォームで連絡お願いします。

記念写真/東北大会（左から佐藤同輩と筆者）



記念写真/全日本大会（左から伊藤監督、菊池先輩、筆者）
（右から小嶺先輩、齋藤先輩、中野先輩）



（追記）

2011年3月11日午後宮古市田老地区が巨大な津波に襲われて、私の実家も流失しました。不幸中の幸いですが私の親戚で命を落とした人は居ませんでした。しかし死亡・行方不明者のなかには私の小、中学、高校の同期生もいました。心よりご冥福をお祈りいたします。

ザンビアで秋田大の空手

昭和49年冶金学科卒業古賀達朗 記

ザンビアという国を御存じだろうか?南部アフリカにある内陸国で、面積は日本の2倍、世界有数の銅産出国で、かつては日本も銅をザンビアから輸入していた。世界三大瀑布の一つであるビクトリアの滝(幅1.3km、落差110m)があることでも知られている。そのザンビアで空手を教える機会を得た。

今から37年も前の話である。今振り返ってみると、ザンビアでの3年間の生活は、色々な意味で私の、原点になっている。その生活で、空手、すなわち、秋田大学空手道部での4年間の経験が大きな役割を果たしたと思うので、少し紹介させていただければと思う。

私は、国の国際協力事業として「人づくり、国造り、心のふれあい」をキャッチフレーズに募集していた「青年海外協力隊」に合格し、1982年にザンビアに派遣された。私が応募した職種は「冶金」、配属先はザンビアの銅鉱山地帯(コッパーベルトと呼ばれる)の中心、キトウエ市にある「ザンビア工科学院(Zambia Institute of Technology;以降、ZITと略す)鉱山学部冶金学科」であった。

教師の経験もなく、「英語による授業を行う」とザンビア政府からの要請書にあるのにも怯まずに応募した。応募者が少ない職種であったことが幸いしたのか、合格した。協力隊員は、3ヶ月間の語学訓練等を無事終了すると、それぞれの派遣国に向かう。当時、年間400人ほどの隊員が派遣されていたと記憶する。

それまで海外に行ったことのなかった私にとっては、ザンビア赴任にともなって見るものすべてが新鮮であった。1982年、3月31日午後、成田空港を発ち、翌朝早く経由地であるボンベイ(今のムンバイ)に着き、そこで1泊した。ボンベイの空港内外は、どこも人で溢れていた。入国審査後、空港の駐車場でホテルに向かうミニバスに乗り込んだ途端、バスの両側の窓に物乞いが集まってきた。中には、腕が肘までしかない少年がいて、それを指し示しながら金を恵んでくれと訴えている。どう対処して良いのやらと戸惑ってしまった。カルチャーショックであった。その後、ホテルまでの道で見た道路沿いの家々及びその周囲の様子は、日本とは全く異なり粗末なものが多かった。アジアでも生活は大変なのだ、アフリカのザンビアではどうなっているのだろうかと思惟し、不安が大きくなっていった。翌日ボンベイの空港を出発し、ザンビアに向かった。ボンベイを出て暫くは海上を飛んでいたが、そのうち眼下に緑の陸地が広がってきた。次の経由地であるタンザニアのダルエスサラーム空港に近づいたのだ。ああ、ついに、アフリカ大陸に足を踏み入れることになる。赴任にあたり、青年海外協力隊の訓練では現地生活事情についても講義を受けたが、ザンビアで

注意すべき事の一つとして、マラリア対策の説明を受けた。マラリアに罹ると高熱が出て死に至る場合もあるとのこと。派遣期間中に「マラリア」だけは罹らないようにしたかった。そのために、アフリカでも良く効くと聞いていた日本製の蚊取線香をたくさん買い込み、持ってきている。

タンザニアからザンビアの首都ルサカ市までは、さらに空路で4時間ほど。成田-ボンベイ-ダルエスサラーム経由でルサカに着いたのは、現地時間4月2日午後であった。ルサカは海拔が1300mほどあるため、日陰に入れば意外と涼しい。ザンビアでは、雨期と乾期がはっきりしている。乾期は4月~10月であり、この間、全くと言っていいほど雨は降らない。11月~3月は雨期で、スコールのような雨が降ったかと思うと直ぐに晴れる日が多いが、日本の梅雨のように、雨雲が空を覆い何日も雨が降り続くこともある。私が到着した頃は、乾期の始まりの時期に当たり、晴天続きで、外出の際に傘の心配の必要はなかった。アフリカの大きな青い空が迎えてくれた。

ルサカに到着後数日して、ザンビア高等教育省の係員が、陸路6時間かけて私をZITに連れて行ってくれた。ルサカ市から北に真っすぐ延びる幹線道路をキトウエに向けて走る。ふと見ると、前を走っている小型トラックの背面に「TOYOTA」の文字が大きく書かれている。我々の車の運転手が、「TOYOTAは世界一強い車だ」と褒める。何となく誇らしい気持ちになる。ルサカを離れ30分もすると、道路沿いには人家も少なくなり、幹線道路に続く脇道は赤土の道路で、その先にはサバンナが広がっている。幹線道路とは言え、所々に大きな穴があり、その度ごと、車はスピードを落として穴を避けて走る所以移動に時間がかかるとのことだった。ZITには先輩の隊員がいて、工業化学を教えていた。ZITの敷地内にある、先輩隊員の住む講師専用住宅に案内された。先輩隊員が家を出迎えてくれた。しばらく先輩隊員の住宅にお世話になることになった。1週間ほどして私の住宅も決まり、引っ越した。私が着任した時、既にZITでは、新学期が始まっていたため、学長に挨拶に行ったところ、次の学期から授業を持つてば良いので、当面は生活の基盤作り授業の準備をして欲しいと言われた。どうやら、ザンビア・ナイゼーション(国の経済の発展を外国人ではなく、ザンビア人自身の手で行おうとする動き)が進められている中ではあるが、まだ、高等教育を国外の講師に頼るところが多く、リクルートされ契約した外国人講師が実際に到着してからでないと、各教科の担任を決められないようだ。

2ヶ月ほどの準備期間ができた。午前8時に自宅から徒歩で5分ほどの鉾山学部の事務所の講師控室に顔を出し、午後4時過ぎには帰宅する生活が始まった。学部長に自分が担当する授業の内容を確認したり、他の講師(英国人、インド人、スリランカ人が多い)からZITでの授業の進め方、副教材作成の仕方等細々したことも教えて貰った。また、鉾山会社で実習中のZITの学生を訪問して、ザン

ビアの銅鉱山の実情を把握するのに努めた。ザンビアの銅鉱山は、国営ではあるが外国の技術者が要所要所に配置され、操業が行われている。ZITの学生が将来的に外国人技術者に代わりザンビア銅鉱山会社を背負っていく日が来ることを期待しつつ自分も授業をしたいと思った。

ZITに到着してから数日後の放課後、自宅にいと玄関のドアを叩く音がした。ドアを開けてみると、学生と思われる3人が立っていた。「放課後に空手を教えて欲しい」とのことである。私が赴任して来ること、空手をやっていたことが先輩隊員から学生達に伝わっていたようだ。彼らを家に入れ、話を聞くと、過去に外国人に空手を教えて貰っていたが、その外国人達がいなくなって教えてくれる人を探していたとのことである。松濤館空手を教えていた英国人がいたようである。授業より先に空手の指導を開始することとなった。ZITの学生は、ザンビアの中ではエリートで、小学生の頃から英語での教育を受けており、癖のある発音・イントネーションではあるが、英語はうまい。私には、本格的に英語で授業を行う前に学生の前で話しをする絶好の機会にもなった。それはまた、授業をするだけでは知ることのできないザンビア人若者の考え方や日常生活を知る機会ともなった。学生達が、学校側と交渉し、週3回、ZITの体育館の半分を使用する許可を取り付けてきた。体育館の床はコンクリートであったが、まあ、贅沢は言えない。秋田大学空手道部の稽古を思い出しながら、準備体操に始まり基礎体力養成(腕立て・腹筋・背筋)、基本動作(突き、受け、蹴り)、続いて移動、約束組み手、自由組み手、最後に型といった2時間ほどの練習をすることにした。基本動作、移動、組手を教えているときには、常に、石郷岡師範、藤原文雄監督や諸先輩より受けた指導内容をそれぞれのお顔と共に思い出し、自分の言葉で指導した。その頃ザンビアでは、日本よりは10年ほど遅れてブルース・リーの「燃えよドラゴン」が映画館で盛んに上映されていた。ザンビアの少年たちの間では、カンフーや空手への関心が高まっていた。日本人であれば皆、空手ができると思われていた。また、少し練習すれば、自分もブルース・リーみたいに動けると思って練習に参加する学生も多かった。しかし、簡単にはうまくならないと思ったのであろう、学期の初めには、50人以上の学生が空手をしたいと体育館に出てくるが、2か月半後の学期末には10数人になっていることが多かった。当然のことながら、残った学生は、次第に上達していったし、彼らとは気心も知れるようになっていた。また、私が、ZITで空手を教えていると知った、近くの町の空手クラブからも教えて欲しいと連絡があり、週末にはこれらの町を訪問し、その様子は何回か新聞でも報道された。このような時、ここに同期の伊藤隆司さん、腹子諭さん、佐藤亮公さんがいて一緒に空手を教えることができたなら、もっと楽しかっただろうな、とよく思ったものだった。空手を教えたことで、ザンビアでの生活にも初めての英語での授業に

も軟着陸することができ、3年間の自分自身の経験に幅と深みが増したと思う。特に、3年間、練習に参加し続けた学生アレックス・ブワリャ(添付の写真にも登場)の存在は大きい。彼は、練習が終わった後、よく、私を呼び止めて空手のことについて色々質問してくることが多かった。ある時、ザンビア人と日本人の平均寿命の違いに話が及び、彼に、人の一生について、「太く長く」生きたいか「細く長く」か、と質問をしたところ、「細く長く」と答えたのを思い出す。私が、ZITを去る時、アレックスもルサカの近くまで帰省するのどと、一緒のバスでキトウエを出発した。私は、準備しておいた私の空手道着をアレックスに手渡した。アレックスとは帰国後も現地で再会する機会があり、現在でも、連絡を取り合っている。出合った時20歳だった彼も、今では定年退職し、白髪交じりになっている。

2020年に東京オリンピックが開催されるが、ザンビアにはオリンピックにまつわるエピソードがあるので、これを最後に紹介したい。ザンビアは、独立前は英国領北ローデシアという国であった。英国から独立したのが1964年10月24日であったため、前回の東京オリンピック(1964年10月10日~24日)に参加したザンビア選手団は、開会式には「北ローデシア」の旗を、閉会式では「ザンビア」の旗を誇らしげに振って国立競技場を行進した。

画質が悪いが、当時、ザンビアで撮影した写真があるので添付したい。



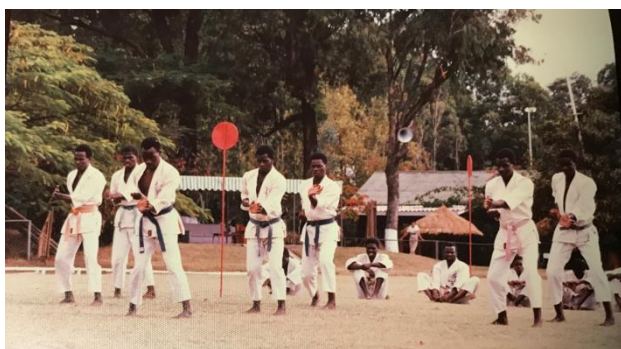
ZIT体育館（空手道場）
最前列左から3人目が筆者
最前列左端がアレックス



隣町チンゴラの空手クラブ
練習後みんなと記念撮影
最前列左から3人目が筆者



上半身裸で練習している
学生が多かった
（胴着を町の仕立て屋で
制作してもらっていた）



首都ルサカのトレード
フェアで行われた形の演武

空手と私

昭和49年機械工学科卒佐藤亮公 記

昭和45年4月秋田大学鉾山学部機械工学科に入学し、大学と秋田高校の中間地点にあった通称「みます食堂」に下宿した。12部屋で、先輩8人同学年4人の大所帯であった。その中に空手道部3年の佐々木先輩、菊川先輩がおられた。

大学生活を有意義に送りたい、また強くなりたいと思い、空手道部に入部した。

薄暗く広い道場、物凄く大人に見えた先輩方、大きな気合の声が飛びかう稽古の雰囲気、圧倒された。

瀬谷主将から「一年生ついて来い！」と号令がかかりグラウンドへ走り、ダッシュの繰り返しに気が遠くなりそうだった。

そして稽古中心の毎日が始まり、へとへとになって下宿に戻った。

ひと月も持たずに体調を崩し腹痛が止まらなくなり、授業も稽古も休み下宿で数日寝ていたが、一向に回復せず骸骨のような形相になってしまった。

もう無理だと意を決して佐々木先輩に退部したいと相談した。佐々木先輩は、「今苦しいのは分かるが、今ここで辞めたらお前は一生負け犬だぞ。それでもいいのか。」

一生負け犬・・・ズシーンと来た。

やるしかない。覚悟を決めたら徐々に体調も回復し出し、何とか稽古についていけるようになった。

高校同窓の三年の石川先輩の気迫溢れる稽古姿に、自分も頑張らなくてはと思った。

掛り稽古で瀬谷主将に我武者羅に向かっていったら喉ぼとけに上段カウンターを頂き、息も声も出なかった。あの衝撃は今でも思い出すが、上段カウンターの重要性を身をもって学んだ。

合宿となり、リヤカーで下宿から布団を運び込み、一年生は食材の買い出し、炊事等、天手古舞状態だった。同期の古賀は料理のセンスもあり、どんかつにポテトサラダを添え、「今年の一年生は料理がうめえなあ」と褒められ、皆でいっそうメニューを工夫した。無我夢中の1週間が過ぎ、痛い足を引きずりながら下宿に戻るときは達成感（解放感？）でいっぱいだった。

夏の合宿は象潟海岸だった。砂浜の稽古で足の豆が破け、砂と塩水が入り夜中もビリビリ痛んだ。

寒風山への40km走行は夜明け前に秋田駅前を出発し、途中足裏がぶよぶよして来たと思ったら、足裏のマメが破けずに足の側面に這い上がってきて膨

れ上がった。寒風山に登り着き見下ろす眺めは爽快だった。

旭川寒稽古では氷水の川底に潜る足裏の感触を思い出す。道場に戻って凍える体に熱いお汁粉がうまかった。

1年が過ぎ、同期の腹子が努力賞（稽古皆勤）を受賞した。

2年になり一年生が入部し、後輩を鍛える立場になったが、自分は小峰先輩から連日徹底的に鍛えられた。立ち稽古中、移動稽古中、休みなく前後左右から突き蹴りを入れられ、体の芯棒を鍛えて頂いた。

試合遠征費用を準備するため、皆で夜の鋳物工場や、藤原監督の会社でアルバイトをさせて頂いた。

石郷岡師範のお宅でおふくろさんのような奥様の手料理をご馳走になった。酒が進むにつれ師範は空手道部の先輩勇者の活躍ぶりを話された。その伝説の先輩方にOB会でお会い出来ることは幸せなことである。

藤原監督のお宅で美人の奥様の手料理をご馳走になった。道場に藤原監督が来られるとピーンと緊張が走ったが、着物姿の監督はとても優しくかった。

秋田大学空手道部の選手の一員となり試合に出場した時は、責任感と感謝と、そして嬉しかった。

秋田県剛柔流大会が秋田大学体育館で行われ、秋田大学空手道部が団体、個人共に優勝した。個人戦決勝は巴戦となったが自分が優勝した。入部したころの自分には想像も出来ないことであり、鍛えて頂いたお陰である。

4年の後半は卒業論文に時間が割かれるようになっていったが、同期の伊藤は主将として後輩の指導など空手への情熱がほとばしっていた。伊藤は自炊をしており、遊びに行くと野菜炒めを作ってくれた。

血判式を迎えたとき、15人ほどいた同期は4人となっていた。共に汗を流した同志であり、卒業後も毎年の懇親が楽しみである。

大学を卒業し会社に入り、社会人生活を送る上で、4年間毎日の厳しい稽古、年6回の合宿生活、先輩、同輩、後輩との出会い、師範、監督のご指導が自分を支える基盤となり、また困難に向かう力となった。皆様に感謝でいっぱいです。

定年後、技能講習の講師をして現在に至るが、今後も秋田大学空手道部員の誇りを持って、微力ながら受講者の安全のために尽くしたいと願っている。

現在の秋田大学空手道部員が伝統を引き継ぎ活躍していることは大変心強いことである。

令和元年の新人がどんどん空手道部の門をたたくことを期待したい。

押忍

記念写真/秋田県空手道大会後（前列右端が筆者）



記念写真/全日本大会（左端が藤原監督、右から3人目が筆者）

